

説教 『天使のような顔』山本 護 牧師
聖書 箴言 10:28~31/使徒言行録 6:8~15

最高法院に連行されたステファノは(使徒 6:12)、偽証されて訴えられ(6:13)、いわば私刑によって殺される(7:57~60)。興奮する民衆(7:57)や民の赦しを祈るところが(7:60)、十字架で死んでいったイエスに重ねられる。最高法院の圧迫を受けても「その顔はさながら天使の顔のように見えた(6:15)」。天使とはそもそもどんな顔をしているのか。悲痛でも、恐怖でも、憤怒でもない。穏やかで、確信に満ちて柔らかく、濁ったところが無く、力で抑えることのできない優しげな表情ではないのか(6:10)。

門戸が開かれた教会には異文化出自の者も集い(6:1)、起こった問題は柔軟に解決された(6:3~6)。ステファノは「“霊”と知恵に満ち(6:3)」、文化摩擦を解決するには適任だった。ステファノによる「霊と知恵」の現れ(6:8)に反発したのは、「解放奴隷の会堂」に属する者たち(6:9)。同じ地中海出自で共感するかと思いきや、逆だった。彼らは異郷で抑圧され、聖都に来ることでかえって反動的な民族派になったのかもしれない。論争で言い負かされると(6:10)、逆恨みして事実を歪曲し(6:11)、数や権威にすり寄る(7:12)。そして既存の安寧を脅かしたイエスを持ち出して(6:14)、人々の危機感を煽った。

ステファノが捕らえられた時、使徒や同輩の兄弟(6:5)はどこにいたのか。最高法院が招集されるほどの大騒動で(6:15)、彼らが知らないはずはない。だが仲間たちの姿は何も報告されていない。ステファノは、ただ一人で責められてきた。ところが「その顔はさながら天使の顔のように見えた(6:15)」。どうかこの法廷の光景を思い浮かべてほしい。なんとも印象的な場面ではないか。

改めてステファノの「天使のような顔」を思い描いてみよう。権威や権力、脅しや甘言で抑え込めないことは分かった。それでは具体的にどんな表情なのか。「主の道は、無垢な人の力(箴言 10:29)」。そうか、無垢な表情なのか。「神に従う人の口は知恵を生む(10:31)」。まさしくステファノそのものではないか(使徒 6:10)。「神に従う人は待ち望んで喜びを得る(箴言 10:28)」。その喜びとは、苦難や危機の中にあっても、無垢で、穏やかで、素直で、視覚的に語れば「天使のような顔」なのだろう。

自分とは無縁だなどと、「天使の顔」を遠ざけないでほしい。よくよく顧みてほしい。少しくらいは心当たりがあるのではないか。私は知っている。皆さん一人ひとりに「天使の顔」があることを。私は自己の内に、「罪人の顔」と共に「天使の顔」をちらと見かけてギョツとした。ステファノは「信仰と聖霊に満ちていた(使徒 6:5)」。私たちは「満ちている」とまでは言えなくとも、確かに聖霊の風に浴しているのではないか。この真実を、このたっぷりの恵みを、軽率な謙遜で手離してはならない。

石投げ処刑で次第に死んでいくステファノを、若いパウロ(サウロ)は傍観し(7:58)、それに同意していた(8:1)。その一方で、十字架のイエスのように(ルカ 23:34)、「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい(使徒 7:60)」と叫び祈るステファノの姿は、パウロの胸深くに刻印された。そして静かな「天使のような顔」がパウロの生涯を大きく転換させていく。しかしその転換が現れるには時が必要だった。パウロはその後しばらく、まるで「天使の顔」をふり払うかのように教会を迫害していた(8:3)。



【おまけのひとつ】

霊の流れはいろいろに伏流していく 十字架は イエスのことを知らない者の 天使の顔となった
天使の顔もまた伏流し 迫害者に表出することになる 教会にはこの水脈に通じる井戸が不可欠